

新たな強敵「ビワキジラミ」との戦い

淡路市のビワ栽培は、安永5年(1776年)に淡路市野島におけるビワ苗木の植栽に端を発している。全盛期(大正初期)には我が国三大産地と称された歴史あるビワ産地が、ビワキジラミという新たな強敵の出現により存亡の危機に直面している。そこで、検討した防除技術の現地普及を進めている。

背景

ビワキジラミは、淡路島では平成29年に発生が確認された新たな害虫である。被害果実は「すす症」を併発して黒く汚れ、商品価値が著しく低下する(図)。ビワは樹高が高く、ビワキジラミの潜む花房の隙間や新梢の付け根に薬剤が届きにくい。さらに傾斜のある園地や高齢の生産者には、防除作業そのものが大きな負担となっている。



図 被害果実とビワキジラミ幼虫

取り組み内容

北淡路農業改良普及センターは、病害虫防除所と連携し、ビワキジラミの発生と被害状況の継続的な調査と薬剤の選定、散布時期及び方法等を検討し、栽培指導にあたってきた。

1 効果的な薬剤散布は…

令和2～3年にかけて、効果的な防除についての実証を行い、次のことが明らかになった。
 (1)薬剤散布は、開花直前の果房が伸びて花蕾に隙間が出来た11月の摘蕾後を基本とし、ビワキジラミの発生や被害状況に応じて3月の袋かけ前にも防除する。また多発時には収穫

後の7月にも防除を追加する。

(2)200ℓ/10aでは散布ムラが生じ、防除効果が不十分なため、樹体の隅々まで行き渡るように400ℓ/10a程度の十分な薬量が必要。

北淡路農業改良普及センターは、このような情報を生産者に伝え、徹底防除を促した。

2 近年の発生状況

令和4年産は、生産者の防除意識の高揚により果実被害は減少した。令和5年産は、袋かけ直前の3月の防除を徹底した園では被害は発生しなかったが、袋かけ直前の防除を怠った園では被害果の発生が見られるなど明暗が分かれた(表)。

表 主産地の成虫数と果実の被害状況
調査時期：6月

地域	ビワキジラミ 成虫数※		果実被害調査	
	被害果率(%)			
	R4年	R5年	R4年	R5年
岩屋	1.2	1.1	20.0	40.0
江崎	0.1	0.9	0.0	0.0
轟木	0.3	0.5	0.0	0.0
黒谷	2.7	0.9	26.1	33.3

※一群の枝葉を棒でたたき、下に落ちた虫をトレイで受けてカウント

今後の方針

薬剤が虫体にかかれば確実に退治できる害虫だが、大きなビワの樹の隅々にまで薬剤を行き渡らせるのは至難の業である。

今後はドローン散布等ICT技術の可能性を検討し、対策を講じていきたい。

福本 宣弘(北淡路農業改良普及センター)
 (問い合わせ先 電話：0799-62-0671)